

「物性論研究」「物性研究」の思い出

京大・工・原子核工 武 野 正 三

私が「物性論研究」と云う雑誌に始めて接したのは昭和29年春京大物理のMCコースに入学し、当時の小谷研究室に所属していた時であった。小谷先生は年に数回東京より来られる程度、富田先生は在外生活中、研究室のスタッフはその外、寺本先生一人の小世帯であった。当時「物性論研究」は京大物理教室関係の購読者の分が10冊程度一括して小谷研究室に送附され、その後各購読者に手渡されると云う手続が取られていたように思われる。所属して間もなくの我々も、雑誌の代金未払分の催促などを荒井さん(Argonne Lab.)より頼まれ、各研究室をまわった記憶が残っている。別紙に書かれてあるように、当時物性論研究の編集者は阪大の永宮先生であった。当時我々の指導を直接担当されたのは寺本先生であったが、主として高分子の排除体積効果等の研究を行って居られた。此等の仕事のいくつかは物性論研究に投稿されたように思われる。私の同級の中条利一郎(現、東京工大)さんも此仕事を分担され、同じ雑誌に投稿された。此等の仕事を見て、私も出来得れば何かやりたいと云う気持ちが出て来たが、暗中模索、MCコースも終りの時期にさしかかって来ていた。当時少なくとも私にとっては、物性論研究に投稿出来るようになることが一つの夢であった。その間、京大基研にも物性関係の部門が出来て、松原先生、豊沢先生が来られ、理学部化学教室の量子化学研究室と共に、手薄だった物性関係も漸く補強されていた。此等、物理教室、量子化学基研三つのグループはPQRと呼ばれ、折にふれてセミナー、コロキウムなどが合同で行われ、我々には此迄になく有益であった。昭和30年も残り僅かとなった頃、私は漸く一篇の小論文を物性論研究に祈るような気持ちで投稿し、少しばかり気持ちを落着けて昭和31年を迎えることが出来た。

当時の「物性論研究」は白い表紙にガリ版の内容であったが、第一線の研究者が競って投稿された時期であったように思われる。当時は現在と異り、雑誌の種類も少く、何よりも先づinformationの量が少なかった。このような時期にあつて、「物性論研究」は研究者に可成weightの大きいinformationを提供していたように思われる。つまり「物性論研究」は「可成の存在意義」を持っていた。「物性論研究」の新着雑誌によ

り、時の重要問題 current topics の一端を可成りうかがう事が出来た。1954～5年頃より1960年頃迄は所謂物性物理理論の高揚期の一つであったように思われる。私に取って最も印象的であったのは、中野一久保の理論 (linear response theory), 豊沢の励記子-フォノン相互作用等数多くの秀れた仕事が続々と英文として投稿される以前に物性論研究に投稿されていたことである。此等の投稿論文の中には所謂レフェリーのある英文の論文には書かれないような裏面の事なども書かれてあって、研究者相互のコミュニケーションに又別の意味で役立ったように思われる。又投稿された論文が読まれて、直ちにそれに反駁の内容の論文が出るなど、とも角面白かった。このような訳で物性論研究という小雑誌は少くとも当時の私にとっては重要な雑誌の一つであり、出来る限り投稿もしたい気持を持っていた。

昭和32年4月より物性論研究の編集は大阪より京都に移され、その編集の責任を化学教室の山本常信先生が担当された。此時より「物性論研究」は第二集として表紙の色も白から茶色に変わった。此色に就ては山本先生が大いに苦心され、煙草のケースの表紙よりヒントを思い付かれたと聞いている。此時より「物性論研究」に就ての事務的工作が少しばかり直接我々に関係したものとなって来た。雑誌の発行は京都の吉岡書店より行われたが、私と田中基之さん(岡山大)はガリ版の校正を担当することになった。2人が pair になり、一方が原稿を読み、他方がガリ版の内容をチェックすると云う形式であった。此仕事は煩雑な割には大したアルバイトにはならなかったが、少なくとも投稿された全論文に目を通さなければならないと云うことになった。時たま型破りの投稿の論文があって我々の気分転換の助けとなった。其等の中で杉田先生の「生体物理とフグ料理」と云う題目の論文は今も鮮かに記憶に残っている。「物性論研究」が京都にその事務を移してより、京都の研究者は当初それをもり上げるべく可成り積極的に努力したように思われる。我々も以前よりもっと積極的に投稿しようとする気持になった。一方、雑誌のページ数も漸次増大していったが、昭和34年頃がそのピークであった。それより以前「物性論研究」の編集者は昭和33年より物理教室の富田先生に変わっていた。富田先生は「magnetic resonance saturation」, 「magnetic double resonance absorption」の二篇の部厚い論文を投稿されたように記憶している。昭和35年より、「物性論研究」のページ数、投稿論文の数は漸次減小して行った。事態の変化に就て、深く考えることもなく、我々は身近かな人々に原稿を書くよう御願いに行ったこともあ

った。これ以前より「物性論研究」はレフェリーのないつまらない雑誌である、どうせ英文として他の雑誌に投稿するのであるから、わざわざ「物性論研究」に投稿する必要はない等の声が聞かれて来るようになった。かくして投稿者の数、ページ数は漸小の一途をたどり、昭和37年第2集第11巻をもって遂に廃刊となった。其頃私は北大に勤務していたので「物性論研究」の末期の事情に就てはよく知らない。とも角何時の頃からか、「物性論研究」に掲載された論文をレフェリーのある英文の雑誌に投稿する論文に引用する時は private communication にするようにとの但し書が雑誌の投稿規定の欄に書かれるようになった。物性論研究の成り立ち等に就ては永宮先生が別紙に書いて居られるので、其辺の事情に就ては此处では省略するが、戦中・戦後の困難な状況の下にあって、研究者の努力により育てられた雑誌が情勢の変化により、やがて段々と無視されて、その存在意義が失われたのであらうと思われる。存在意義が何故失なわれたか等の理由については断定的結論を下すことは出来ないであらう。

唯気になることは、外国の雑誌に時たま、「物性論研究」に掲載された論文が引用されていることである。

昭和38年10月より、当時の基研所員碓井先生、森先生、長岡さん等の尽力により「物性論研究」に変わって新たに「物性研究」が刊行されることになった。刊行の理由等に就ては vol. 1 に書かれてある。又、別紙に長岡さんが書いて居られるようである。今読んでみると色々以前にない新らしい企画が出されている。此辺の事情に就ても直接タッチしていなかったもので、私には語る資格はない。其後在外生活などして「物性論研究」或は「物性研究」の事も忘れていた頃、昭和42年より基研所員となり、今度は、「物性研究」の編集委員の一人となって再び此等の雑誌と接するようになって来た。久方振りに又かかわり合いを持つようになってからの此雑誌の内容は、情勢の変化により昔と比べて相当変わったものになっていた。所謂研究論文と云ったものは非常に少く、以前になかった「講義ノート」、「大学特集」、「人の動き」、「研究会報告」、「プレプリント案内」等等である。今日に至る迄如何なる事情によるのか引続き編集委員の一人として「物性研究」の事を時折考えなければならないようになって来たが、基本的な情勢はそれ以来大体変っていないように思われる。「物性研究」の京都編集員及び各地編集員は色々人の交代はあるが、この雑誌を存在意義あるものにすべく新しい企画を打ち出して読者の意見を聞いていったが、残念ながら反応は何時も少なかった。何よりも

気になったのは若い研究者からの投稿が少く、又反応も少なかったことである。白い表紙の「物性論研究」時代と比べると、周囲の環境の変化と共に、「物性研究」に対する研究者のイメージも相当変ったようである。それは致し方のない事であろう。私が編集委員の一人になってからの「物性研究」に就ての事を昔のことと同様、此処に書く気持は起らない。此辺の事情に就ては松田さんが書かれると聞いた。研究者の数、一般的投稿論文の数の増大等により、ジャーナル、プロGRESS等の国際的な雑誌にも色々な問題点が出て来ている。information 増大の時期にあつて、「物性研究」も今年で発刊10年になる。よくこれ迄続いて来たものであると一面では考えられるであろう。「物性研究」は今日、昔とは少し異った形で information を読者に提供しているが、もしそれに存在意義があるとすれば、たとえ間違つた内容のものであつても、時の、又将来の問題提起につながるような研究論文が気楽な形で投稿される雑誌でありたいと云うのが私の夢である。

後記：専ら記憶に頼り、事実を一つ一つ check する暇がありませんでしたので、間違い、思い違い等があれば御許し下さいます様御願ひ致します。

“物性研究” 創刊

名大・理 長 岡 洋 介

この原稿を書くため、図書室に入って書棚に並んだ物性論研究と物性研究をながめてみた。白い表紙の物性論研究ははじめの東大編集の分はそろっていないが、阪大編集の分は1949年から1957年3月発行の106号まで約9年つづいている。このあと京大編集による黄色い表紙の物性論研究第2集は5年ほどつづく。そして青表紙の物性研究はもう10年になるわけである。まだ白表紙には及ばないが、黄表紙はとうに越してしまつたことになる。創刊当時の事情を思いおこしてみると、よくつづいたものだというのが私のいつわらざる感想である。実のところ、私はもっと早くつぶれてしまつた